

講 演

マルタとマリア

山 田 晶

今日は「マルタとマリア」という題でお話をいたします。

ご紹介にありました通り、私はアウグスティヌスとか、トマスなどが専門ですから、マルタとマリアのことなどは知るはずはないと思われるかもしれないけれども、実はこのマルタとマリアの話というのは、若い時からとても気になって、いろいろ考え、ああでもないこうでもないと考えてこの年に至り、何とか皆さんにお話できるようなところまで来た、そういうお話でありますので、学会などで発表するには少し的外れかもしれませんが、この藤女子大学では話させていただいても悪くはないのではないか、そして、そういう機会があったのもやはり富沢司教様のお招きではないかと、そういう風に考えまして、お話しさせていただきます。

このマルタとマリアの話は有名でありまして、ミサの中でも、マルタとマリアの祝日があります。その元となるのが、皆様にお配りしたルカの福音書、第1章の38節からです。

「一行が歩いて行くうちに、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女がイエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足元に座って、その話に聞き入っていた。マルタはいろいろなもてなしのためにせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った、『主よ、私の姉妹は私だけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃって下さい』。主はお答えになった、『マルタ、マルタ、あなたは多くのことを思い悩み、心乱している。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない』」

このマルタとマリアの話というのは、ヨハネ伝にも出てくるんです。ヨハネ伝の第11章の1から44までですが、そこにはもっと詳しく、マルタとマリアの関係が出てくる。ここではマルタとマリアはナザレの近くの小さな村のベタニアに住んでいたとある。それからラザロという弟がいた。それで、有名な、ラザロを復活させたという、その話のところにも、マルタとマリアが出てきます。

ところが、ルカでは、そういうことは何も書いてなくて、ただある村にお入りになった、と書いてある。このマルタとマリアは、ベタニアのマルタとマリアと同じなのか、同じでないのか、二つの話が、福音書を書く時点において混同したのか、等、聖書学の点からみると、そういういろいろな問題があるかもしれませんが、今回のお話をするにあたっては、そういうことはあまり問題ではないと思います。ただイエス様が弟子たちと一緒にある村に入った、そしてもしヨハネ伝のマルタとマリアが、このマルタとマリアなのであれば、それはベタニアという小さな村であったろうということです。

そしてそこで、イエス様はマルタとマリアの家へ行き、妹の方のマリアは主の足元に座って、そのお言葉にただ聞き入っていた。ところが姉のマルタは色々ともてなしをするために台所で働いておった。そこでマルタは、それはちょっと不平等だ、という気持ちを起こして、妹にも手伝わせて下さいと、イエス様に言ったのですね、そうしてイエス様に叱られたわけです。

さてこのマルタとマリアの話では、いったい何が意味されているのか、福音書は何を言おうとしているのか、ということについて、いろんな人々がいろんな解釈をしました。

私もこの点には非常に興味がありまして、いつも御ミサで、マルタとマリアの福音書が読まれるところに来ますと、神父様はこれについてどんなお説教をするかと思って、聞き耳をたてているんですけども、神父様によって、みんな違うんですね。だからどうやら、公式的な、これはこういうわけだ、というような解釈はないらしいですけども、歴史の中でやはり伝統的な解釈というものは生まれているわけです。

それはどういうものかという、一つには、この姉妹は象徴的な意味

を持つのだ、という解釈の仕方です。マリアは、「観想的生活」(vita contemplativa)の、またマルタは「活動的生活」(vita activa)の、それぞれ象徴であるというわけです。

このマリアの方の「観想的生活」というのは、つまり神様、あるいは永遠といえますか、真理をじっと眺めて思いめぐらす、そういう生活であり、またマルタの方の「活動的生活」というのは、実際にこの世の中でいろいろ活動して生活するということで、これらはもとはアリストテレスのニコマコスの中に出てくる言葉です。人間の生活の中には、真理を観想する生活と、実践の生活と、2つのパターンがあるというわけですね。しかし、結局は、真理を観想する生活の方が優位である、優れている、そして活動というのはその次であるという、そういったことが、アリストテレスの中では言われております。これはある意味ではプラトン以来の、ひとつの伝統的な考え方かもしれない。

福音書の中では、実際はそういう、観想とか、実践とか、そういったことはどこにも出てこないわけだけれども、おそらくギリシアの初めの教父、誰だかはわかりませんが、そのあたりの人たちが、このマルタとマリアの問題をそういう仕方でもって解釈した。つまりマリアは他のことは何もしないで、じっとイエスさまの言葉に耳を傾けていた、それに対して、マルタの方はお勝手でもって、いろいろごちそうを作ってもてなそうと働いていた、そういう2つの生活が、「観想的生活」と「活動的生活」との、ひとつのモデルであるのだ、そしてまた、イエス様は、マリアが一番いい場所を選んだと、つまり、活動的生活より観想的生活の方が優位である、優れていると、こう言われたと、そういう解釈ですね。この解釈は、ひとつの伝統的なマルタとマリアの解釈となりました。

そしてこの観想と活動というのは、片方はひたすら祈る、また片方はそのために実践するという、そういう2つの生活の型としてみられたわけです。たとえばアウグスティヌスなんかの中にもこのようなことは出てきて、彼は正直ですから、自分で打ち明けている。自分も、一所懸命になって観想的生活をやりたいと思うんだけど、とにかく忙しくて、なかなか観想の時間がとれない、やはりこの世の中のいろんな雑事に追われている、と。この世の中の雑事と言っても、彼は別に商売をしているわけではなくて、教会の中で、司教として働いているわけなんだけれ

ど、それも結局は活動的生活であると、だから自分一人でお祈りする時間がなくて困ると、アウグスティヌスのような人でさえ、そういうことを言っているんです。

それで何とかして、その観想的な生活というものと、活動的生活というものを一致させようとしたのが、トラピストの開祖ですね。そのビジョンは「祈り、かつ働け」であって、祈るということによって観想的な生活、労働せよということで活動的生活、トラピストの修道士たちはその両方を実現しようとしていた。それはある意味において、マルタとマリアを何とかして調和させようとした、そういうことだとも考えられますね。

これがトマスになりますと、彼ははっきりと、『神学大全』の中で、観想的な生活は活動的生活に優ると言っていて、その優る理由を彼らしく9つ挙げています。その9つをいちいちこの場で挙げる必要はないと思いますけれども、そういうわけで、この観想的な生活の優位というものは、中世におけるこの問題の伝統的な解釈になっていったわけです。

しかしまたこの、観想的、あるいはその方向に携わっている生活というものは、世間の中でいろいろ心配したり苦勞したりしているような生活よりも優っているんだ、という見方は、単にこの問題だけの伝統的な解釈であるに留まらず、人間観、人生観、世界観、また社会観にも及んで、カトリック教会のひとつのあり方を規定していった、ということがあるのではないかと思うのです。つまり、祈りに専らとなるような、観想的な生活というものは、神により近い生活である、それから、この世間により近い生活は活動的生活であって、それより一段下のものである、という、その関係性の延長は、いろんなレベルで考えられるということです。

たとえば、一つの修道会というものを考えてみるとしますね。祈りに専らとなるところの、司祭とかそういうものと、その司祭を助けて色々労働したり、味噌を作ったり、畑を耕したりするような、助修道士というものとは、やはり修道会の中で区別されてくる。助修道士の方は、一段下といいますか、そういう風になる。それから今度は、その考え方がもっと大きくなりますと、やはり聖職者と、平信徒というものの差となってくる。聖職者というものは、神に近い生活であり、平信徒というものは世間の中にある、だから聖職者の方は、神父様とか、童貞様とか、司教様とか、「様」づけだけれど、平信徒は「平信徒様」なんて言う人は誰

もない。そういうところに出てくるんですね。

実は私は、それまではカトリックのこともプロテスタントのことも何も内容を知らなかったんだけど、自分がカトリックに入信して、びっくりしたことがあるんです。それは、何と海軍と似ているか、ということですね。

私はたまたまに、つまり志願でも何でもなくて、徴兵でもって海軍の予備学生になったわけだけれど、海軍では士官というものと、下士官兵というものが、画然として区別されている。住むところも違うし、食うものも違うし、もう扱いが全部違う。その我々はどういう立場かという、それまでは学校にいてですね、途中から引っ張り出されて、士官の形だけになったわけですね。こういうのを予備士官というわけです。

この予備士官というのは、ほんとの士官から見れば偽士官で、たまたま特攻要員のためにね、士官になっているだけ、というような考え方がある。それからまた下の下士官から言わせると、あの連中は今までぶらぶら学校で遊んでいたようなのが、ただ大学出ただけでもって士官になりおった、俺たちは何もかも下っ端のことをやらされて、こんな苦勞しているのにとね、だから下からも面白くないと、いじめられる。上からも下からもというわけで、たいへん苦勞した。そういう苦勞は後にも先にも誰も知らないわけで、だから、「きけ わだつみのこえ」とか、「雲流るる果てに」とか、特攻隊や、あるいは戦没学生のいろんな書物を見ても、若い人が読んでも感激するかもしれないけれども、その「きけ」という声、その声というものの非常に深いところは、我々のような予備士官体験を持ったものでないと、わからないんでないかと思うんですね。

きわめて純粋な気持ちでもって、軍隊へね、国のためと思って入ったのに、思いがけない、上から下からのいじめにあって、そういう中で、彼らはそんなことを何も声には出せない、言えない、ただ黙々として、飛行機でもって、特攻隊でもって、死んでいった。だから我々がそういうものを読むと、その声の奥の奥の方の声がですね、何か、聞こえてくる。その慟哭の声が、正に聞こえてくる、そういう感じですね。

ところが、実際には、そのちゃんとした士官の中にもまたいろんな区別があって、やはり一番正統的なのは兵学校出である。中でも士官学校などがもっとも良くてですね、他のいろんな学校は脇役で、本当の士官

とは考えられない。それから非常に苦勞して、下士官兵の中から、難しい試験をいくつもくぐってやっと士官になったようなのもいて、それは特務士官といわれて、これは見るからにわかる。兵学校を出た士官はみんな色が白くてぼちゃぼちゃしてて、若々しくてスマートです。しかし特務士官というのは渋皮でね、年からいったって、じいさんになってやっと士官になったというね。そういういろんな区別があったわけです。

私が戦争が終わって一番嬉しかったのは、そういう差別の世界からやっどこさ逃れて、今こそ士官でも下士官でもない、普通の元の学生に戻れる、ということでした。ところが、今度はカトリックに入ったら、とたんに平信徒という一番底辺のところに位置されている。そして、平信徒は神父様の指導に従わなければならない。何か本を読むんでも、いちいち検閲を受けなければならない。神父様の言うことに従ったら、だいたい読んでいいものは、聖人伝か、靈的読書だけである、私たちが読むようなトルストイとかそういったものは、そんなものは読んじやいかん、と言われる。何か突然差別の世界の一番どん底に自分が置かれてしまったような、そういう気持ちでした。

ですから、マルタとマリアの話聞いたとき、僕はむしろ、マルタに同情したわけですね。マリアの方は何もしないで、それでイエスのそばにおいて、お話をゆっくり聞いておった。ところがマルタの方は一生懸命になっていろんなことを、お勝手の仕事や何かやって、ご馳走を作って、その上「マルタや、マルタや」なんて言って叱られたんじゃないかと思っ、それでマルタに同情したんですよ。それが私の当時の実感でしたね。

しかし、そのような考えを抱いた人は、私だけじゃなかった。その考えは昔からあったんでしょうけれども、はっきりとそう言って公言したのはエックハルトである。エックハルトとはどういう人かと言いますと、トマスは13世紀から14世紀にかけてのパリ大学のドミニコ会の大学者ですが、そのすぐ後の人です。やはりドミニコ会の修道士で、立派な学者であったんですね。ところがエックハルトは、学者として、ラテン語のいろんな書物も書きましたけれども、同時に、ドイツの出身だったものですから、ドイツの民衆に向かっていろんな説教をした。それはみんな、その当時のドイツ語の方言で書かれている。そのドイツ語の方言が

ですね、その当時のドイツの民衆には非常に受けた。そして彼は非常にみんなから、良く読まれ、良く聞かれたわけですね。相手は百姓だとか、正に世俗的な人々、世界の中で苦しみ働いている人々ですね。同じ聖職者と言っても、世間の中の司祭であり、むしろマルタに属するような階級の人々であったと言えます。

そのエックハルトが、マルタとマリアについてはどういう話をしたかという、それまでの伝統的な解釈をひっくり返した。それで、マルタのほうがマリアより偉いんだと言った。つまり、修道院の中でお祈りなんかしている人間よりも、この世間の中で汗水たらして苦勞してる、マルタのような人間の方が偉いんだと言った。

だから、まあそれだけの理由ではないでしょうけれども、彼は当時の教会からにらまれて、長い間、エックハルトは、教会からは異端者とされていたわけですね。もっとも、最近になってから、新しくいろいろな文献が発見されて、それは改革されたらしいけれども、つまりそれほどエックハルトは正統的ではなかった。ひっくり返したことを言ったわけです。それにもかかわらず、それは一般の民衆には非常に受けた。そしてそれは、私が平信徒の立場で考えたようなことを、当時の一般の民衆が考えていたからではないかと思えます。

そしてこの、マリアよりもマルタの方が偉いんだ、という思想は、西洋のプロテスタンティズムの基本になったと思うんですね。そして、それに対して、あくまでもマリアの優位と言うか、その考え方を支持したのが、その当時、そしてそれ以降のカトリックであると、言えると思います。ですから、マリアとマルタの話というのは、そういった中世以降のキリスト教の基本的な考え方を2つに分裂させたという、そういう意味を持っていると思うんですね。

そしてそのマルタの優位を説く人々の子孫たちは何をやったか、と考えると、そこからルターとカルヴィンが出てくるわけですね。ルターのやったことは、要するに、それまでの教会の持っていた階級制度というものを撤廃すること、ですね。特に聖職者と平信徒との相違と、区別といったものを撤廃する。だから彼は、万人が司祭であると、こう言ったわけです。その中の特別な人間が司祭であるとか、そういうものではないと、そう言った。これは、ルターの伝統のプロテスタントの、今にい

たるまでの、一つの基本的な思想になっている。

またもう一つの、カルヴィンの方も同じ事です。カルヴィンもそういう差別をすべて撤廃した。そしてすべての人間、すべての信者が、キリストの前に平等であると、だからいろんなことを決めるときは、その中の長老たちが、いわば民主的に決めていくんだと。だから近世以降の民主主義というものは、そういうところから出てきたと、言うこともできるのではないか。

ただ、その先というものを考えてみますと、そういうような新しい、中世では抑圧されていた、いわば異端的な思想というものが、公然と公言されるためには、やはりそれを受け入れる一つの力というものが基になければならなかった。

ルターの場合は、それがドイツの諸侯であった。そしてその諸侯の力というものが、教会の権力というものに対抗できるようになってきたから、そこでルターもその諸侯たちの保護を受けながら、自分たちの説を主張することができた。

ところがそれを続けて考えてみますと、ルターはその仕方によって万人司祭を説いたけれども、しかしそれが受け入れられたところはドイツという国家であるから、やはり国家の保護を受けなければならん。すると国家の保護を受けてキリスト教が生きてるわけですから、カトリック的キリスト教は否定されたけれども、いわば国家的キリスト教というものが肯定される。そうするとどうしても、キリスト教国教会というものを指導するものとして、聖職者が必要となる。ただその聖職者は昔のような司祭やなんかじゃなくて、これは国家公務員になるわけですね、国家の管理人になるわけです。つまり、国家の中のエリートが試験を受けて、牧師になる。だから牧師という階級は、非常に優秀な人たちの集まりであったわけです。それはイギリスにしても、ドイツにしても同じですね。それから同じようなことはカルヴィンについても言える。

ところが、ルターの考え方そのものを完結しようと思うと、その状態ではカトリック的教会主義が国家的教会主義になっただけのことで、制度的にはやはり同じ事が起こってくるわけだから、そういうものをあくまでも排除しようというのが、ピューリタンとか、クエーカーとか、そういったものになってくる。そうするとこれが、中世において異端が迫

害されたように、今度は近世の国家キリスト教によって迫害された。そして彼らはそこから逃げ出して、アメリカへ逃げて行く。だからそういう、国家的なキリスト教の迫害を受けて、どこまでもキリスト教の福音を守ろうとしたようなピューリタンたちが、新しい大陸に国家を作ったと、そういうことが言えると思いますね。

ところが、そのピューリタンたちが、今度はアメリカのインディアンたちを皆殺しにしたわけですね。そこにはまたしても、マリア優位のような考え方がある。つまり今度は、キリスト者に対して非キリスト者が区別され、差別されている。自分たちはクリスチャンなんだから、しかも純粋なキリスト者なんだから、そうでないインディアンたちは殺したって構わんというようなのが、基本的にある。

ある人が、どうしてキリスト者たちが、しかも純粋なキリスト信者たちが、どうしてその大陸でたくさんインディアンたちを殺して平気だったのか、わからない、と言ったけれども、この論理でいけば、キリスト者であればあるほど、それは正当化されるわけで、実はわかるわけですね。要するにそこには、今度は差別というものが教会での差別ではなくて、キリスト教徒の非キリスト者への差別というものとなってあらわれたというだけなんですね。

同じようなことは、日本にあったキリシタンにも言えると思います。何かキリスト信者でないものは、キリスト信者と差別されなければならないというね、あるいはそうなって当然だというような考え方が、基本にあるんじゃないかと。それは現在では批判されていますが、過去の経過を見るとそういうことがあったわけです。

そしてもう一方、あくまでも中世の伝統を固持して、昔のままに留まった、近世以降のカトリック教会というものがどうなったかというのですね、これはドイツなどとは逆に、カトリック教が国教化されて、国教的カトリックになったわけです。それがスペインとか、ポルトガルとかに代表されるような国ですね。

そうすると、この国々においては、キリスト教は昔のままにカトリックなんだけれども、そのカトリックたるや、それがキリスト様のカトリックであるかどうかという非常に問題であって、要するに国家に奉仕する教会になっていったのです。これはもう明らかですね、南米とかそっ

ちの方の国々では、みんな基本的に、そのような方向性においてカトリックを布教していった。その結果が、今の解放の神学とか何かという仕方でもって、中からの反発に苦しんでいるわけです。

このように、マリアとマルタの問題、神様に近いものほどマリア的で優れているという考え方と、それに対する、いや、世間のほうが本当にキリスト教を実践する場であるとする反発とが、近世以降の政治とか文化とか宗教とか、そういうものを規定する基本的な要因になっている、ということが言えると思うんです。

そこで私自身は、そういうことを色々と考えた末、今はどういうことを考えているかということ、そもそも、伝統的な「マリアとマルタ」に対する考えが、つまり、マリアは神様に近い所に位置するところの存在であり、マルタは世間の方に位置する人であるという、この解釈がですね、果たして福音書の言うところの、イエス様の言うところの、「マリアは一番良い場所を選んだ」という意味であるのか、ということ、もう一度改めて考えなきゃならないと、そう思うわけです。

この伝統的な解釈では、人間の中には、神様に近い生き方をしている人と、世間に近い生き方をしている人とがいるという形があって、だからこそ、その前者を是とするか後者を是とするかという対立があったわけです。

ここで考えなければいけないのは、イエス様はそのどちらもいいと言っているのじゃなくて、はっきりと、マリアが一番良い場所を選んだ、とこう言っているんだから、キリスト様は結局マリアの方に軍配をあげている、ということなんです。

ではそれを、今までのような、マリアは観想とか、マルタは活動とか、そういう枠組みで、それに対するイエス様の評価だと考えていいんだろうか。そういうことを、改めて考え直す必要があるんじゃないだろうか。

これまでお話してきましたことは、歴史的な一つの経過であって、現代という時代は、その解決を求めて苦しんでいる時代であると思うんです。そして、これから申し上げるようなことは、それに対する私の考えですから、それは一つの考えであって、人におしつけるものではないのです。けれども、今まで自分が色々考えてきて、今の段階で、私はこん

な風に考えている、と、いうことはございますので、それをお話したいと思います。

ではまず第一に、マルタがイエス様から叱られたのは何故であろうか、ということを考えてみたい。そうすると、今までのだいたいの考え方では、マルタはがちゃがちゃと台所の仕事なんか気に取られて、イエス様の言葉を聞かなかつた、だから叱られた。つまり世間のことに気に取られたということに、マルタの良くない点はあるらしい。しかし果たしてそれが、ここでイエス様がマルタを叱られた理由なんだろうか。

今ここではこう考えてみるんです。マルタはとても世話好きで、実行力があってですね、少し軽佻なところはあるけれども、人はいいという、そういう人だったらしい。そのマルタさんは、イエス様に来られたので、さっそくもてなしてあげたい。何かいいものを、ご馳走を作ってあげたい。で、台所で一所懸命になって苦労した。そして、何を作ろうとか、芋を焼こうとか肉にしようとか、てんぷらを作ろうとか、そういうことでもってあれやこれやと思い巡らしていた。それでイエス様に叱られたのだろうか。そうじゃないと思うんですね。それは、常識的に考えても、誰かお客様がある時にですね、誰かはおお客様の相手をしなきゃならない。と同時に、みんながそういうことをやってたんじゃ、これはもてなしにならない。だから、誰かは陰で、色々ご馳走の世話をしたり、いろんなマルタ的なことをしなきゃならん。

同じ修道女でも、専らお祈りをするような修道女もいなければならぬけれども、受付にいて外の人と接触するとか、市場へ行って買い物をするとか、そういう働き方をする修道女もいなければならぬのと、それは同じ事です。だから、それがいけないと言ったら、これはおかしい。だいたいそんなことをイエス様が言ってるはずはないんです。

だから、行ないが活動的であるとか世間的であるとか、世間に触れているとかそういうことでもって、イエス様は、マルタをとがめたのではない。じゃあ何だろうか、という気持ちで、もう一度ルカのテキストを見てみますと、そこには、マルタが主に言った言葉があるんだね。「主よ、私の姉妹は、私にだけもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃって下さい」。問題は、そ

こにあるんじゃないかと思う。

つまり、それぞれの人間に役割があって、ある人はお祈りを一所懸命するという、そういう役割もあるかもしれない。しかしながら、その人たちを守って、その人たちの生活を保つような、そういう人もいなければならない。市場なんかには買い物に行ったり、あるいはお台所で活動するような、そういう人もいなければならないんです。そんなことはイエス様だってわかりきっている。だからそんなことで、もしもイエス様がマルタを叱ったとすれば、それはイエス様はおかしいんです。

けれどもそんなことで叱ったんじゃないんだよね。何で叱ったかという、マルタが、自分のやっていることを、マリアのやっていることと、まず比べたということですね。そして私は損だと思ったんだね。つまり自分はこんなに苦労している、マリアは何もしないでいい子になっている、不公平だ、と、こう思ったんですね。つまり自分の使命を、誰か他の人の使命と比べて、そして自分の方が何か損をしていると思ったという、これが一つだと思うんです。

それからもう一つには、それを思ってもじっと我慢してたらいいいんだけれど、マルタはイエス様にそれを告げ口するわけです。あの子は私にばかりこんな苦労なことをさせて、自分だけいい子になっているけれども、どうお思いですか、と、そういう風に告げ口をするということ。

そして第3に、私を手伝うように言ってください、とイエス様に命令しているわけですね。自分の考えを、イエス様を通して、相手を動かそうとするわけです。そういったようなことが、イエス様の気にさわったんじゃないかと思う。決して、台所で働くために心を動かした、それを気を散らしていると言っているのではなくて、その仕事に一所懸命になって集中して、私はこういう仕事を一所懸命にやって、マリアにはイエス様の相手をしてもらいましょうと、それで何か聞きたいことがあったら、後でイエス様が帰ってから、どんなお話だったかマリアから聞きましょうというようなね、そういう気持ちでいれば、イエス様は決して、マルタや、なんて言って怒りはしなかった。

そういう風に考えますと、これは他人事ではなくて、我々もそういうことはよくあるんじゃないかと思うね。我々一人一人が、何か仕事、使命がありますね。だからそういう仕事を一所懸命になってやっていれ

ばいいんですよ、それは神様の意志に従っているわけですからね。でも時々、俺はつまらん事をやってるとか、何か人のものと比べて、損をしているような、そういう心持になることがある。

しかし、人は人で、それぞれの使命があってやっていることで、それなりにやはり意味があるのだから、それを考えないでやたらに自分と人とを比べて見たりするのは、良くないということだと思います。だから、あの人にはあのことをやってもらいましょう、私はこのことを一所懸命やりましょう、それが神様の御心だから、という、そういう素直な気持ちでいさえすれば、イエス様は決してマルタを叱らなかつたんです。

ですから、今までの考え方とは、世間の事、という、その意味が違うわけですね。何もこの世の中で、色々食ったり飲んだり、そういうことを世間の事というんじゃない。どんな修道院の奥へ行っても、誰かと比べてみて私は損だとか、あの人はいい子になってるとか、もしそんなことを思うとすれば、それが正に世間の事なわけです。つまり自分自身の仕事にひたすらに献身して、そして他の人には他の人の、それぞれの仕事があるんだから、それを思って、そしてそれを助けてやるとか、祈ってやるとか、そういう気持ちになることが大切だということだと思うんです。

ですから、ここでイエス様が「あなたは多くの事を思い悩む。心乱している」と言ったのは、芋を煮ましようとか、肉を焼ましようとか、そういうことで悩む、ということじゃなくって、今言ったような、自分のやっている事と人のやっている事を比べてみて、自分は損をしているとか、悪い子になっているとか、そういう風にとること、それが思い悩みだと思うんですね。そうするとやっぱりこれは他人事ではなくて、我々の生活の中にはそういうことはたくさんあるような気がする。

それからもう一方では、ではマリアはどうしてイエス様に誉められたか、という問題がありますね。それは、伝統的な解釈によると、観想的な生活をしていたからだ、という。観想的な生活というのは、アリストテレスなどによれば、真理をひたすらに考察すること、そして他の事を忘れてしまう、それが観想的な生活であるという。そのような意味での「観想的な生活」を、この際のマリアに当てはめて言えるのだろうか、それが問題だね。

その時にイエス様が、真理とか何か、抽象的なものとして、どこか、天の彼方にあって、それを観想するなら観想する、と言えるけれども、ところが実際にはマリアの目の前にいるわけですから、それを観想するなんていうことはないと思うんですね。それを、ジロジロとイエス様の顔やなんかを見つめたら、イエス様はちょっと気持ち悪くなっちゃうんじゃないかと思うんですよ。それですから、これはおかしいと思うんです。観想的な生活というものは、見えないものを見ることであって、見えているイエス様をジロジロと見ても、それで「観想する」なんてことはできないですよ。そんなことをするはずがない。だからこの場合を観想的な生活と言うのはおかしい。

またね、ここで、イエス様が色々教えて下さるから、その教えに耳を傾けるために、マリアはじっとおそばを離れなかったのか、という、これも私がおかしいと思うんです。というのは、今でも憩いの家をよくベタニアと言うように、このマリアとマルタの家はイエス様の憩いの家だったんだね。それも、夏休みに別荘にいるというような意味での憩いではありません。これは、イエス様は最期の、エルサレムに向かう、その途中での事柄なんですよ。ということは、その時にはもう、決死の覚悟ですね。自分が行けば、もう必ず捕まって、殺されるという、決死の覚悟で行くわけですね。だんだんとユダヤ人たちの反感がつのってきて、彼らはイエス様を殺す機会をみんなでうかがっているんです。いつ殺されるかわからない、そういう中で、弟子たちを連れてある村へ入った。というのは、ベタニアの、マリアとマルタのいるところは、これはイエス様にとっては心の休まる場所だったんですね。

だから、マルタを叱ったと言ったって、そんなに悪玉みたいに思っているわけじゃなくて、そういう風に形式化するのは後の人間の解釈であってね、イエス様自身は、マルタとマリアは両方とも可愛がっておったんだ。2人の姉妹は、性質はそれぞれ違いますけれど、どっちもね。

そして、そういう憩いの家にいるということは、イエス様はそこで、いつ殺されるかわからないような緊張や、すぐ目の前にあるような死というものを目前にしての不安から、しばしの憩いを、マルタとマリアの宿でね、得た。そういう場面ですよ。

そういう状況の中で、マリアはイエス様のそばについて何を聞いてい

たのか。今更、福音勧告などをね、汝姦淫するなかれとか、汝盗むなかれ、なんて事を聞くためにいたんじゃない。そんな事はもうマリアにはわかりきっていることですからね。だからむしろそこで行なわれていたのは、イエス様の気持ちを休ませるといふか、それに同感する、Mitleidするということだと思ふ。イエス様は、その当時としては、何も言わないでいいから、とにかくそばにいてくれといふ、私を少し慰めてくれといふ、そういう気持ちだったと思いますね。それを一番良くわかったのがマリアだった。だから黙ってそばについていた、そうじゃないかと思うんですね。そうすると、これは、隠棲的な観想的な生活とはだいぶ違うものです。だから、世の中の事を忘れて、天国のことだけを考えるとというような意味での観想じゃないんですよ。

正に今生きて、これから死のうとしてしているような、ある意味で絶対な孤独の中にいるイエス、そのそばにいて、今更言うこともない、口先でもって何とかかんとか言うようなことはもうない。そこで、黙ってそばについている、そういう、その気持ちがマルタにはわからなかった。だからあの子はいい子になっているとか、そういううすっぺらな考え方がぬぐえなかった。

そういう意味でマリアを見てみますと、福音書の中にね、大事な時にマリアは出てくる。十字架のもとにあるとかね、それから最初の復活の時に墓場にいたのもマリアだった。そういう一番大事な時に、マリアが出てくる。マリアというのは、聖母マリアじゃなくて、今の話のマリアがね。

これを、少しこのマリアを離れましてね、現在のことで言うと、私は自分の事を話すのは恥ずかしいけれど、皆さんに具体的にお話するために言いますと、私の妹は、高校生の子供を残して、癌で死んだんですね。亡くなる時にはもう子供は高校を出ておりましたけれども。

それでその病中、もうどうにもならない、ただ死を待ってるような時に、その妹の息子、つまり私には甥にあたりますが、その甥には後に一緒になった相手がおりました、もちろんその頃にはまだ一緒になってなくて、彼女はどこかへ勤めておりましたけれども、その子が、勤めが終わると必ず妹のところへ、病院へですね、やって来てくれて、そして何も言わないで黙ってね、夜、消灯の時間まで、必ず黙ってそこに付き

添っていてくれた。丁度言うなれば、マリアがね、死の近いイエス様のそばに付き添っていたようにね。

それが、どのくらい妹にとって慰めになったかわからないと思うんです。口先でもって、今更言うようなことは何もありません。ただそこでは、いろんな不安や苦しみとかたくさんある、その人のそばに付き添っている、それだけで、どんなに慰めになったろうか。それにもう一つには、その娘さんは後になって甥のお嫁さんになったわけですが、当時の妹とすれば、息子はこれからどうなるだろうとか、そういう不安もあったと思うんです。けれど、こういう娘がいてくれるから安心だと、そういう意味の慰めでもあったんです。けれどそれもくどくどと言わずに、ただ黙ってついていてくれた。だから私は、今でもその娘に一番感謝している。彼女が妹にとって、一番慰めになってくれた。

それと同じことだと思うんです、この、マリアというのはね。それをもしも観想というのなら、まあ観想と言ってもいいけれど、それは真理を観想するとか、そういうことじゃない。目に見える、現実に生き、しかも死に直面して、人間としてのいろんな不安とか孤独とか、そういうものの中であって、しばしの憩いを求めてね、ベタニアの、自分の可愛がっていた姉妹の家に休んだという、そのイエスの状況を考えると、その時のマリアのいた場所は、それは観想的と言ってもいいけれども、伝統的に言われてきた「観想」とは、少し違いますね。それは何と言ったらいいか、つまり傍らにいる、口先でどうこうじゃなくて、苦しんでいる人のそばにいるという、それだけのことですね。

そういう風に考えて行くと、マリアとマルタの話の意味が、何だかわかってくるような、そういう気がします。

そこで最後に、最初の富沢司教様の話に戻りますとね、私はカトリックに入信するまではカトリックもプロテスタントも何もわからなくて、要するに自分のことだけ考えて洗礼を受けたんだけど、中に入ってみてくると、今言ったようないろんな形式的な割り切り方ね、それから、階級の区別とかね、そういうものが色々目に付いたから、それをさかんに富沢司教様におちあげた。しかし富沢司教はそれに反対したことは一度もない。いつも喜んで聞いて下さった。私はその頃まだ若かったもの

だから、その当時学生はカト研とか何とかといってさかんに運動をしておったので、そういうところに行ってさかんにけしかけて、煽動みたいなことをした。それで学生たちは喜んでくれたけれども、自分としてはどうも危険を感じてね、ちょっと不安になっていた頃だった。

ちょうどその頃、富沢司教は公会議の委員になられて、ずっと公会議の様子を見られていた。そして、それから帰って来て私に会いたいと言って、富沢司教様が一番最初に言ったことは、山田先生、先生の言う通りになりましたよと、こうだったから、それで私は安心したんですよ、俺の言ってることは異端じゃない、と。やはり公会議でもその通りになったんだから、これで安心だと、そう思った。

ところが、それ以降になってくると、逆に安心が反対になっちゃって、それがむしろ極端な方向に言ってる気がするんだよね。つまり、区別の重要性というものはまったく無視されて、何か平面的になって、何でも同調し、協調して行くことがいいことになっている。

だから、やはり今は、マリアの優位っていうものは、あるんじゃないか、と思います。しかしもちろんそれは、階級の差別を擁護するような、伝統的解釈の観想的生活を是とするマリア優位ではなくて、人のそれぞれの役割に関係していうところのマリア優位ということです。教会というものは、世界のためにあるもので、教会のためにあるわけじゃない。だから、教会の中のいろんな役割というものも、みんなそれぞれの存在理由があるわけです。我々は一人一人が、神様から、何か人にはできない仕事を与えられているわけですよ。それは、自分が好きでその仕事をやったというのではなく、何か運命的にこういう仕事をしなきゃならなくなってきた、ということもあると思う。しかしとにかくそれぞれに与えられた仕事があるわけで、それを一所懸命になってやるという、正にその点では、カルヴィンやルターが言ったように、一人一人が神様の召命を受けているわけです。ただ、その召命の内には、皆のためにも尽くさなければならんということを含んでいるわけです。自分だけが神様に近づくとか、そういうことではなくて、自分のすることがみんな自分の周りの人々のためになるような、そういうことが、その召命の中には含まれている。

他に自分と違うことをやってる人はいっぱいいるわけですね。自分と

違う考え方の人もいます。けれど、自分が一所懸命に自分のことをやっていたら、やっぱり人にもそれなりの存在理由があるだろうと思えるわけですね。みんなどこかで神様につながっているわけでしょうからね。そうしたら、マルタのように、これをどう思われますかとか、私を手伝わせて下さいとか、言うのではなくて、むしろ逆になる。自分のできないことはあの人がやってくださっていると、やってもらいましょうと、いうことになる。そして、その人のためにその仕事を喜ぶ、祝福するという、そういうことになっていく。自分を中心にして、人のすることをねたんだり、あるいは悪口を言ったりね、そういうこととは、まったく方向が逆になるわけです。

そういう意味で全体を考えたときに「観想的生活」というものが、初めて非常に深い意味を持って来るんじゃないかと思います。つまり、信者方のことを考えてみますと、信者方はみんな、それぞれ自分の仕方で一所懸命やっている。でもそれは、誰によって出来るのだろうか、ということですね。自分が今こういうことをやっているのは、誰かが自分のために祈ってくれているからじゃないか、それがあからさまに出来るんじゃないか。これは別に、カトリックに限らなくて、それぞれの人が自分の仕事をやれているのは、やはり自分の知らない人たちに支えられているからではないだろうか、ということでもあるわけですが、それを教会の中で考えてみると、我々が知らないところで祈ってくれている人がいる、ということですね。

祈りというのは一種のエネルギーであって、うつってくる、伝播してくるわけです。たとえば言うと、電気というのは、光になったり、電灯だとか、飛行機だとか、いろんなものを動かしていますね、だから電気の力を見ようと思えば都会を見ればいい。都会では華やかな電気がちかちかしている。しかしながら、その電気はどこから来るかというと、山を越え、海を越え、野原を越えてね、発電所から来る。発電所ってというのは、原子力発電所、火力発電所、水力発電所、とにかく山の奥とか、海の果て、岬とか、そういうところにあって、そこから伝わって来て、それで都会に電気がある。そしてその一番もとの所では、誰かがそれを守っているわけです。

そしてその今の例でいうと、原子力発電所というのは、そこにいる人

は、すごく危険な場所にいるわけです。それは正に、霊的な意味でも言えるんじゃないかと思う。つまり人々の活動の一番根源のところに、いわば自分自身を犠牲にして、全く燃料にして、そのエネルギーを消費している、そういう人たちがいる、という、これを忘れちゃいかんと思うんですね。観想修道院などがそういう場所なのかもしれない。そういう所は、エネルギーが、原子力が強いから、そこにいとあんまり長生きできない。だからそういう所にいる人は早く死んでしまう。

有名な「聖女テレジア」は、3人いるんです。第一のテレジアはアピラのテレジアで、大きな仕事をした。もう一人のテレジアはマザー・テレサ（テレジア）でね、これもインドで大きな仕事をした。そしてその中間に、小さき花のテレジア、リジュのテレジアという人がいます。このテレジアは、カルメル会の観想修道院で、わずか20いくつかでもって亡くなった。しかし、何か、霊的エネルギーの根源になったんですね。そういう人の力が、遠くの、アフリカだとかいろんなところで働いている。一番遠いところの人へ伝わっているわけですね。それで生きているわけですよ、教会というのは。

そういうことを考えますと、形は修道女とかそういうものにならなくてもですね、何か心の中に、あまり喋らない、語らない、それで隠れているような部分で、霊的エネルギーの根底にあるものを持った人はいると思います。

つまりそれが今回の話でいうと、イエスさまのそばにいてね、そしてその苦しみを共にしたマリアであるわけですが、このイエスさまの代わりに、兵士の、負傷した患者をあてはめてみてもいいんですよ。そのそばにいて、苦しみを共にしている、そういうような人は、表には見えないかもしれないが、大きな霊的なエネルギーになっているのじゃないかと思います。マリアというのは、そういう意味の存在なんですね。

これからは、確かにいろんなものの考え方が変わっていかなきゃならない時代だけれども、我々がマルタとマリアの意味を考えてきたのも、そういうところにこそ理由がありはしないかと思います。

最後に、マルタかマリアか、どちらかがどうか、あるいはマリアが善玉でマルタが悪玉だというような、そういうわけ方は間違っているのではないかと申し上げておきます。イエス様は、マリアもマルタも両方

を可愛がっていたと思います。だから今でも御ミサにはマリアとマルタの両方の祝日があって、どちらも聖女になっているのです。そういうわけですから、何かもの考えるときに、これはいい、とか、これはわるい、とか、そういう風に決めつけて考えるのではなくて、両方の中に、その元に同じ芽から出ているものがあるのではないかという、そういうものの考え方が、これからの時代には役に立つのではないかと思います。どうもありがとうございました。

(付記：本稿は2000年7月7日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所創立記念講演を文章化したものです。)